

学びの自己調整等に係る位置づけ

中谷 素之（名古屋大学教育学部）

目 次

1. 次期学習指導要領に向けた検討の基盤
2. 自己調整学習という視点
3. 自己調整学習の事例
4. 学びの自己調整：
個に応じた「主体的・対話的で深い学び」の実現

(1) 「学びに向かう力・人間性等」の位置づけ という課題

学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ

参 考 資 料 ⑩
令和7年9月25日
教育課程企画特別部会
論点整理 P 1 8

【現行の記述】

【今後の整理イメージ】

小学校学習指導要領総則解説（抜粋）

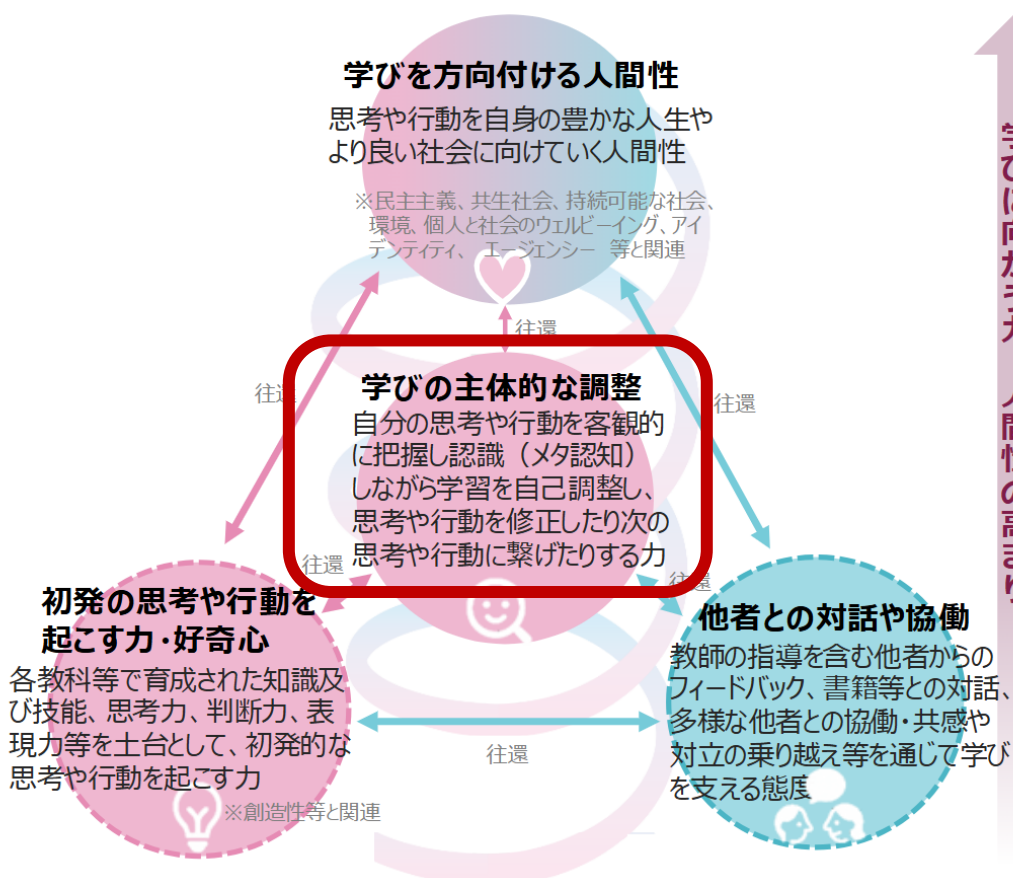
児童が「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」に関わる「**学びに向かう力、人間性等**」は、他の二つの柱をどのような方向性で働かせていくかを決定付ける重要な要素である。

（中略）

児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、**主体的に学習に取り組む態度**も含めた**学びに向かう力**や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、**自分の思考や行動を客観的に把握し認識する**、いわゆる「**メタ認知**」に関わる力を含むものである。こうした力は、社会や生活の中で児童が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。

また、**多様性を尊重する態度**や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた**態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやり**などの人間性等に関するものも幅広く含まれる。

変化が激しい不確実な社会の中で、**学びを通じて自分の人生を舵取りし、社会の中で多様な他者とともに生きる力を育む**



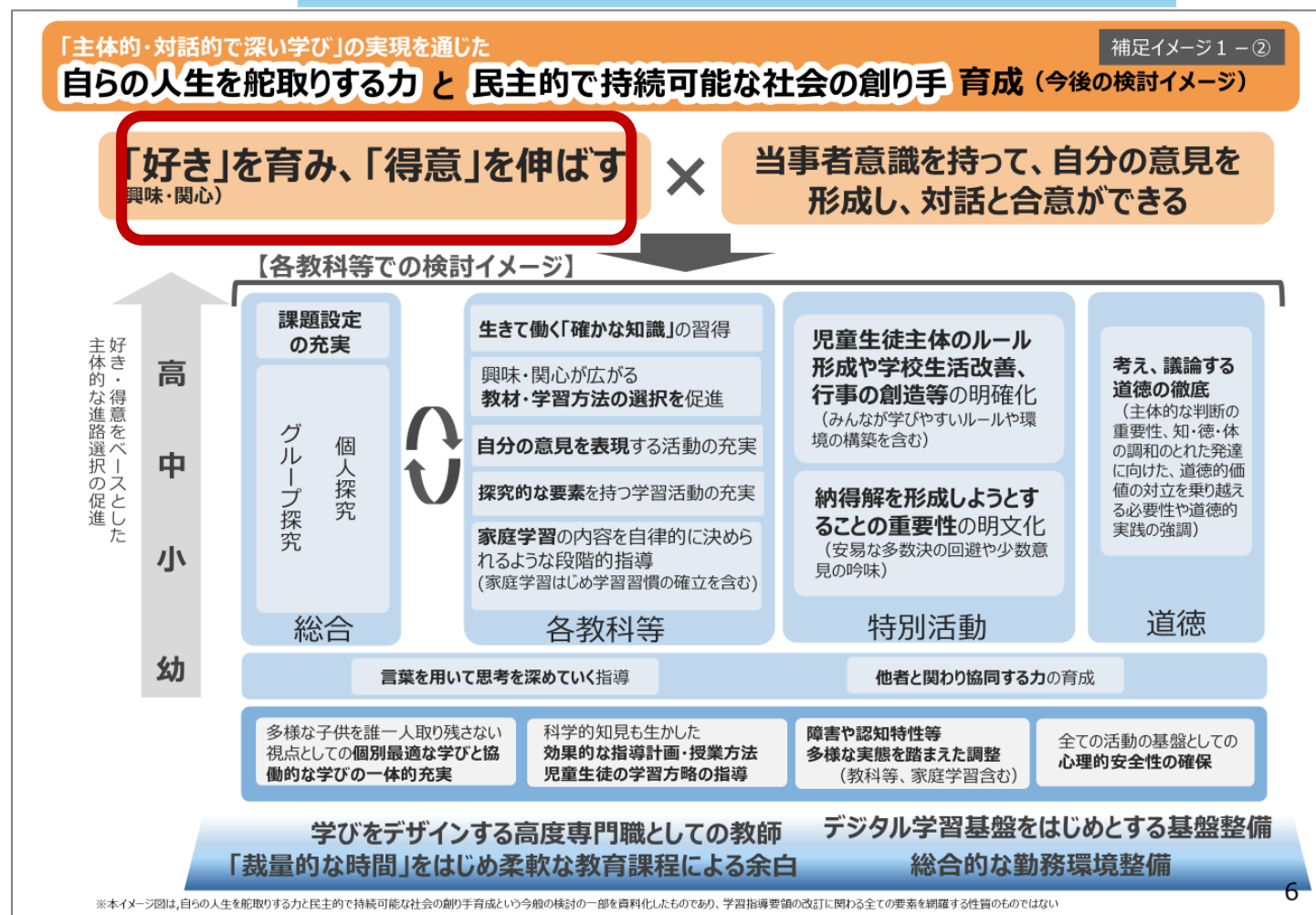
※「初発の思考や行動を起こす力」と、「学びの主体的な調整」「他者との対話や協働」との往還を通じ、粘り強く継続的に思考・行動する経験が繰り返され、「学びに向かう力、人間性等」が育まれる

(2) これまでの議論からの経緯（一部抜粋）

- 子どもが、自分の関心に気づき、適切な方法で行動し、強みにする するためには、「教師から教え込まれる（一方的な）学び」ではなく、「**子ども自身が考え、選択・決定し、行動できる**」ことが重要

Q 現在の学びはそうになっているか？

⇒◎学びにおける「自己調整」の重要性



第1回総則評価特別部会
【資料1】教育課程企画特別部会 論点整理（案）
p. 6 抜粋

(1) 学習者は「主体的・自律的な存在」である、というコンセプト

「学びは、子どもが一方向的に受容するだけのものではなく、
主体的、自律的な取り組みである」

「目標設定、学習の取り組みや方法の選択、自身の学習プロセスや結果の振り返りを自ら行う、主体的な学習」のこと。
背景として「教え（込め）なければ学ばない」という前提への疑義。

「学びの自己調整」の理論的基盤

硬い定義：「学習者が認知・メタ認知・行動において、自らの学習過程に能動的に取り組む学習のこと」（Zimmerman, & Schunk, 2001）

(2) 予見—遂行・コントロール—省察 という学習サイクル

- 学習とは、「理解」だけ、あるいは「思考」だけではなく、「見通し」「目標」をもち、どのような学習方法が自分に合うのかを「選択」「遂行」し、学習過程を振り返り、よかったところ、困ったところなどを「省察」できる、というサイクルである、という提起。
- 授業内、単元内、学期内など、ミクロからマクロまでの学習を想定可能。

(3) 教師による指導との関係

- 一部で言われているような、「教師が教えない」「子ども任せ」「自習時間のドリル学習」とは全く異なる

⇒ 適切な指導・支援のもと、子どもが自ら関心を深め、自分にあった考え方ややり方を見つける機会や環境を与えることが非常に重要。

3. 自己調整学習の事例

(1) 自分らしく学ぶために：学習のやり方、進め方（学習方略）への注目

学習のやり方（学習方略）の重要性：“どう学ぶか”“どう理解するか”

- 子どものやる気を基盤に～動機づけ方略
- 勉強のやり方を工夫する～認知的方略
- 自分のやり方を客観的に考える～メタ認知方略 ※参考資料p. 12

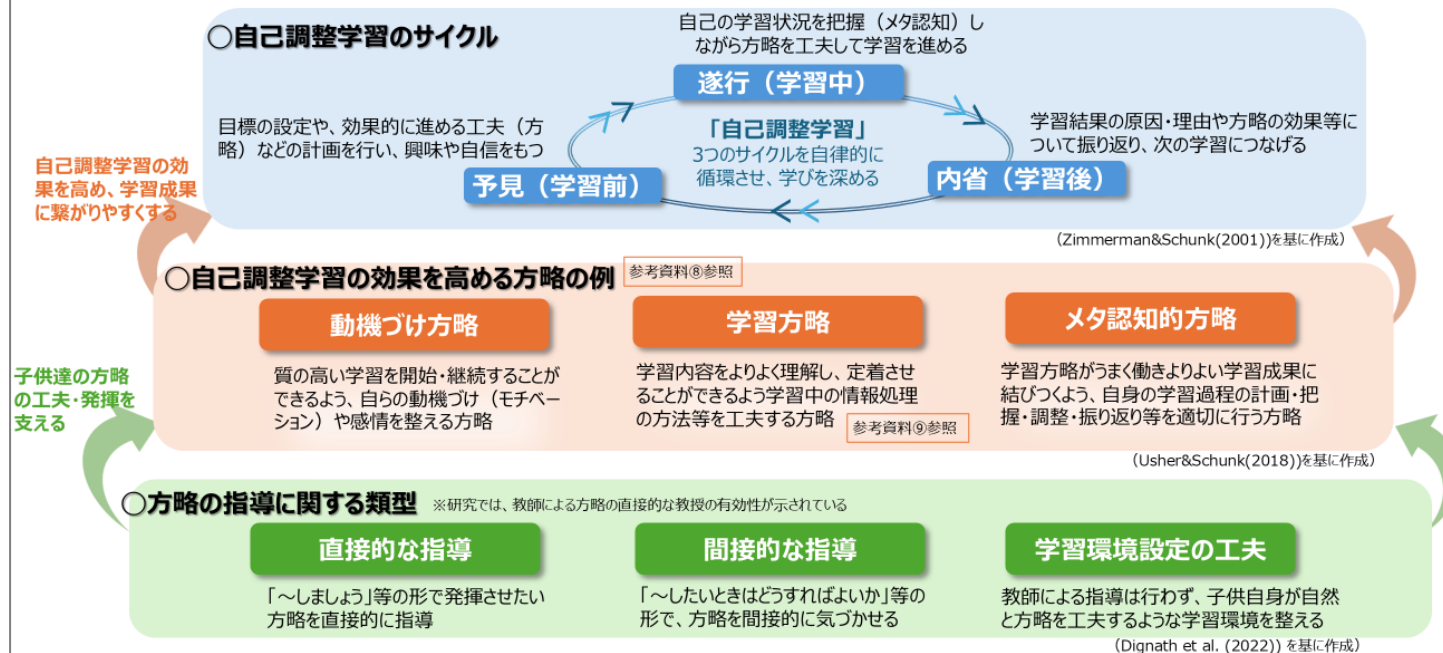
教授した方略の種類	効果量
メタ認知的方略	0.70
認知的方略	0.37
メタ認知的方略と認知的方略	0.78
動機づけ方略	0.94
メタ認知的方略と動機づけ方略	1.13
認知的方略と動機づけ方略	0.69

(Dignath et al., 2008 をもとに作成)

岡田, 2023 より

◆自己調整学習のサイクルや、それを促進する要素等に関する研究上の知見

参考資料①



◆子供が自ら学習を調整しながら学びを進めるための学校現場の実践例 (単元内自由進度学習を含む、自治体や学校の事例等を基に記載)

参考資料⑩参照

単元や題材の設計

- 子供達が意欲的に取り組むことができ、全ての子供が育成したい資質・能力を育むことができるような単元や題材の設計
- 単元全体の目標や内容、流れを子どもと共有することで学習の見通しの明確化
- 個別・協働・一斉といった学習活動の効果的な配置

多様な学習材料の提供 足場かけの準備

- 子どもが自分の力で学ぶことができ、自らにとって学びやすいものを選択できる多様な材料の提供
- 子どもの特性や学習スタイルに応じて選択できる多様な学習材料の提供
- 学習の見通しを持つことや学習の進捗状況の把握、学習の振り返りがしやすい学習材の開発 等

学習環境の整備

- 安心して学習に取り組める空間づくり
- デジタル学習基盤も活用しながら、生徒間や外部との協働を通じた学びの深まりや、生徒自身が学習に必要な情報に必要なタイミングでのアクセスを可能とする 環境づくり 等

(2) 授業実践例

正解にたどり着く典型例の指導から子ども自身の思考や解決のプロセスが許容され評価される学習課題の指導

地域発の公立学校の試み（愛知県の例）

- ・ 東浦市立緒川小学校 個性化教育の伝統・実践：
例 週間プログラム「週プロ」による学習（単元内自由進度学習）
- ・ 名古屋市山吹小学校 授業時間の自己設計（山吹セレクトタイム）
- ・ サポートマガジン「みるみる」の実践事例（主体的・対話的で深い学び の実践例）
※参考資料
プロジェクト（問題解決）型学習
探究学習
などで、
子どもの取り組みや主体性を重視した学習過程が重視されるケースも（実践例）

次頁以降参照

⇒ 各教科における自己調整の指導との往還の可能性

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』掲載の実践事例①

参考資料⑤

実践編①

「ワクワク」と「真剣・能力」の
どちらも備わらない！
戸田市立戸田東小学校の挑戦

全ての子供が熱中できる
単元づくり

【実践編①】戸田市立戸田東小学校の実践事例

- 第5学年／社会／単元「自動車をつくる工業～みんなの願いを乗せた夢のクルマプロジェクト～」
- 単元構想のポイント（本時1/11時間）

自動車工業に関わる人々の「思い」や「願い」を着眼点として、子供が自分なりの「夢のクルマ」を考える課題を学習のゴールに設定し、自動車づくりを自分事として捉えながら工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉えられるようにする。



学習意欲を高める単元を通じた魅力ある学習課題の計画

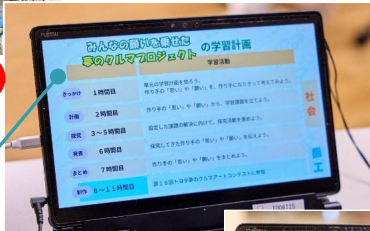
学習前

自動車にこめられた作り手の「思い」や「願い」を単元を通じた着眼点として提示。その上で、単元末に子供一人一人が自分なりの「夢のクルマ」を考え、まとめる活動を計画（学習内容を生かして「トヨタ夢のクルマアートコンテスト」へ作品を出品）。子供のワクワク感を高め、単元のゴールを意識した目的ある学習を促す。

単元の学習計画の共有

学習前

単元導入時に、単元全体の大まかな学習計画を子供と共有。子供が見通しをもって自律的に学習を進めることを促す。



単元を通して考えること 自動車にこめられた人々の「思い」や「願い」とは何なのか？			
知識・理解	思考・判断・表現	主体的な態度	
A	・作り手の「思い」や「願い」が日本の自動車工業を支えてきたことを理解している。 ・日本の自動車産業の工程や、世界と日本の違いについて理解している。	・作り手の「思い」や「願い」といふもののことを、資料や写真などを使って見るようにして観察している。	・学習を楽しんでいる。 ・自分に合う考えや意見がなくても、自分の学習に集中できている。
B	・作り手の「思い」や「願い」が分かる。 ・日本の自動車産業の工程を理解している。	・作り手の「思い」や「願い」を、資料や写真などを使って表現している。	・学習を楽しんでいる。 ・自分に合う考えや意見がなくても、自分の学習に集中できている。
C	・日本の自動車産業の工程を理解している。	・作り手の「思い」や「願い」を、自分の言葉で表現している。	・学習を楽しんでいる。

ルーブリックの提示

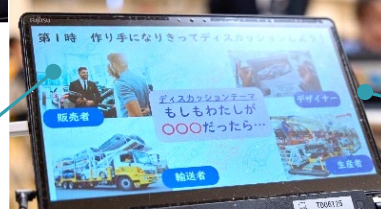
学習前

単元の目標に照らした観点別の評価基準を分かりやすく表したルーブリックを提示。子供が「目指す姿」や自らの資質・能力の高まりを意識しながら学習に取り組むことを促す。

学習課題の工夫

学習中

「カーデザイナー」「生産者」「輸送者」「販売者」4つの選択肢から選んだ立場になりきって、作り手の「思い」や「願い」を探る課題を設定。自分の興味・関心に応じた選択肢を設けることで、子供に自分事として追究することを促す。



学習を自ら調整できる場面を計画的に取り入れる

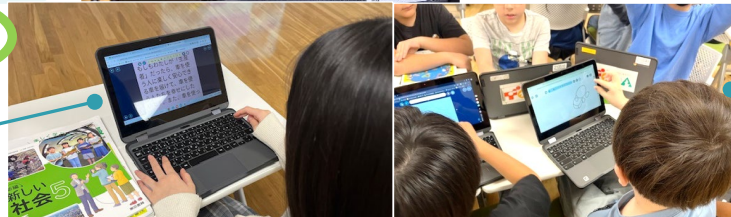
学習中

4つの選択肢から自ら選んだ立場を踏まえて、工業生産に関わる人々の工夫や努力を探究する学習課題を設定し、自ら学習を調整しながら学習を進める場面を計画的に取り入れる。

多様な教材を活用できる環境整備

学習中

教科書、資料集の他、デジタル端末を活用して必要な情報にいつでもアクセスできる環境を整備。子供に目的に応じて多様な教材を選択したり組み合わせたりしながら工夫して学習を進めることを促す。



他者と協働できる環境整備

学習中

追究の状況に応じて友達同士で協力して学習できる環境を整備。子供に必要なに応じて友達と協働しながら自らの考えを広げ深めることを促す。

状況に応じた教師の支援

学習中

子供一人一人の学習状況のきめ細かい見取りを基に、学習がうまく進んでいない子供には発問したり具体的にアドバイスしたりするなど適切に支援。子供のより探究的な学びと学びのさらなる深まりを促す。



互いの考えの共有・関連付け

学習後

「カーデザイナー」「生産者」「輸送者」「販売者」それぞれの立場で考えたことを全体で共有。子供に互いの考えの関連付けを促すとともに、次時への意欲付けや見通しをもつことを促す。

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」のためのサポートマガジン『みるみる』掲載の実践事例②

参考資料⑥

【実践編④】加賀市立山代中学校の実践事例

- 第3学年／英語／単元「Unit6 Beyond Borders (New Horizon3)」
- 単元構想のポイント（本時1/9時間）

国際協力、相互協力、相互援助をテーマに扱い、国際社会に対する願いや自分たちが貢献できることについて、国際社会の一員としての子供たちの意識を高めながら、仮定法や関係代名詞といった言語材料を用いて自分の考えを英語で発信することができるようにする。



学習の目的意識を高める導入の工夫

日本と発展途上国それぞれの子供たちの学校生活に関する写真等を提示し、それらを比較させる活動から導入。恵まれない環境に置かれた子供たちの生活に触れることで、単元のテーマである国際協力や相互援助への子供の意識を高め、その後の学習の目的意識を高めることを促す。

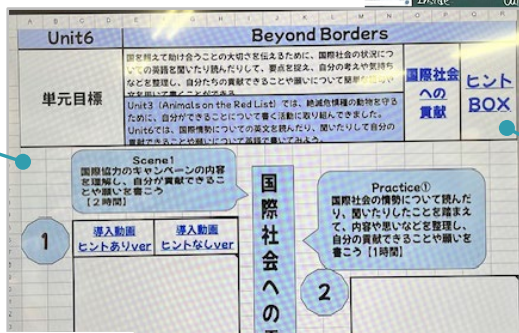
学習前



「単元マップ」による単元の学びの共有

単元導入時に、単元名、単元の目標、単元の学習の流れ、時数、教材（学習材）、評価の観点など、単元の学習に関する情報をまとめた「単元マップ」をデジタル端末・クラウド環境を通じて共有。子供が見通しをもち、単元全体の学習を俯瞰しながら自律的に学習を進めることを促す。

学習前



つまづきを支える学習材の用意

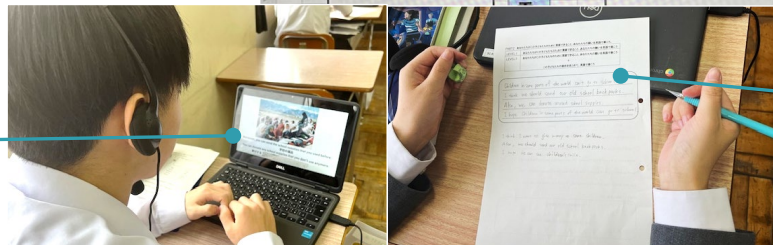
「単元マップ」内に「ヒントBOX」を設け、子供がつまづきやすいポイントに応じてヒントとなる資料を用意。子供に必要なに応じていつでも参照し、自らつまづきを克服して自力で学習を進めることを促す。

学習中

個々のペースでアクセスできるデジタル教材の活用

デジタル教科書とともに、主教材となる「国際協力のキャンペーン動画」（「英語の字幕あり／なし」の2種類）は、「単元マップ」を通じてクラウドで保存。子供は何度でも動画視聴が可能となり、自分のペースで粘り強い取組を促す。

学習中



選択できる課題レベルの設定

動画視聴の後、「この地域の子供たちに貢献できること・現状に対する想い」について自分の考えを英語で書く活動の際には、選択できる2種類の課題レベルを設定。子供に理解度に応じて自分に合った課題を選択して課題にチャレンジすることを促す。

学習中

教師による積極的な見取りと支援

子供一人一人の学習状況を見取りながら、特につまづいている子供・困り感を抱く子供に対しては、学習内容のみならず、英語科の特性に応じて学び方のコツを積極的に助言。子供の自律的な学びを支えるとともに、学習意欲の持続を促す。

学習中



振り返りの実施と蓄積

単元マップと一体化した振り返シートを用意し、学習活動ごとに「学習への取り組み方」「次時に取り組みたいこと」などの視点を提示して振り返りを実施し、記録を蓄積。子供に学びの手応えの自覚と、さらなる学習改善、自律した学び手への成長を促す。

学習後

(3) 「学びの自己調整」のための指導と環境

- 子どもに「委ねる」実践 → 学習をすべて子どもに任せる、わけではない
- 「どんな教科・単元の」「どんな内容について」「どのように・どの程度」委ねるか、が重要
- …実際に子どもが学習の中で決定できている割合は必ずしも高くはない

⇒ 教師による単元の設計、方略等の指導や、多様な足場かけの準備など、教師の指導性・それが可能になる力量形成が重要

⇒ それでも、教師や教科書から教える・教え込むのではなく、子ども自身の思考や理解を基盤にした学習過程はきわめて重要であり、今後適切に位置づける必要があるのではないか

4. 学びの自己調整：個に応じた「主体的・対話的で深い学び」の実現

（３）「学びの自己調整」を準備すること

学びの自己調整を児童生徒が円滑に行うことができるようにすることは、「主体的・対話的で深い学び」を一人一人に応じて実現していくための重要な手立て

現在進められている、
資質・能力の一層の「構造化」、
教育課程の「柔軟化」の議論は、

⇒教師と子どもに、
学びの「余白」を生み出すもの・・・余白をどう生かすか？

学びを、子どもの個に応じた、自己調整を可能なものにすること
そのための教師の指導・支援と環境づくりは極めて重要

今回の総則における記載の議論とあわせ、一体として進めていくことが必要